Ⅲ　日本の成立と新羅・渤海

——理念と現実

第6章 飛鳥仏教の背景

六世紀にはいってからの新羅の急成長は、ついに加耶の併合をもたらし、文字どおり高句麗・百済・新羅の三国による対抗の様相がふかまりました。さらに、中国の情勢が大きく変化します。北朝から出た隋が五八九年、ついに南朝の陳をほろぼして南北朝の分立に終止符を打ち、七世紀にはいると、唐がそれに代わっていっそう強力な体制をつくりあげました。強大な統一帝国の出現という東アジア情勢のなかで、倭国も朝鮮三国とともに厳しい対応をせまられますが、同世紀末には、倭国は「日本」として、古代の統一国家を完成させるにいたります。このような聖徳太子の時代から大化の改新をへて律令体制の構築にいたる過程は、いかにも一貫したみちすじをたどったようにイメージされやすいものですが、朝鮮三国の抗争の帰趨も見通せないなかでは、外交政策ひとつをとりあげても紆余曲折があったにちがいありません。ここではまず、聖徳太子の時代について、飛鳥仏教にあらわれた朝鮮三国との関係にしぼって考えてみたいとおもいます。

(1) 仏教の公伝

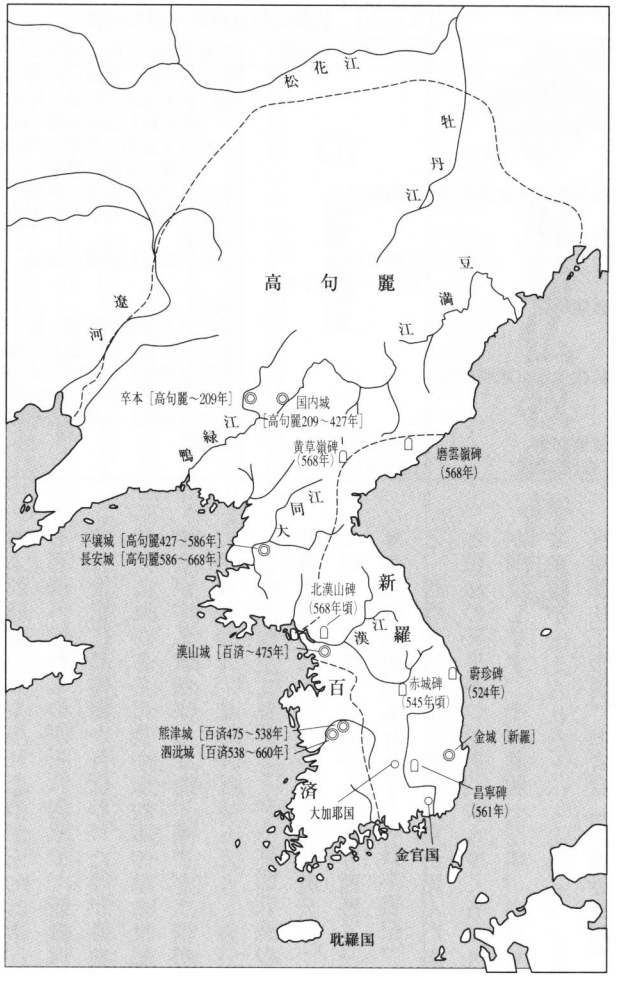
［6－1］ 仏教公伝と朝鮮半島の情勢

日本書紀	法王帝説・縁起	西暦	朝鮮半島の情勢
		513	（百済）己汶・沙帯へ圧力
		522	（大加耶）新羅と同盟
			（新羅）加耶南部へ圧力
		529	（大加耶）新羅との同盟解消
			（倭）安羅へ進駐
継体死去／安閑即位	欽明即位	531	（百済）安羅へ進駐
		532	（新羅）金官国を併合
宣化即位		535	
	仏教公伝（戊午＝欽明７年）	538	（百済）泗沘へ遷都
欽明即位		539	
		541	（大加耶・百済・倭）任那復興会議
		551	（百済）高句麗から漢山城を奪回
仏教公伝（欽明13年）		552	（新羅）百済から漢山城を奪取
		554	（百済）新羅との戦闘で聖王戦死
		562	（新羅）加耶地方を併合
欽明死去（在位32年）	欽明死去（在位41年）	571	

インドから中央アジア経由で中国に伝わった大乗仏教が、さらに朝鮮半島へ伝播するのは四世紀のことでした。中国北朝の前秦から高句羅に僧が派遣され仏像および経文のおくられたのが三七二年、南朝の東晋から百済へ伝わるのが三八四年で、新羅へはすこし遅れて五世紀に高句羅から伝わったのが最初だといわれます。これがさらに倭へ伝わるのは六世紀になってからですが、仏教伝来もまた、東アジア情勢の変動と密接につながっていました。

百済の聖王（ソン）（聖明王）から欽明天皇のもとに仏像や経典が贈られた、いわゆる「仏教公伝」の年次については、よく知られているとおり西暦五三八年と五五二年の二つの説があります。『日本書紀』の記述によると、西暦五三一年に継体天皇が死んだあと安閑・宣化と短命の天皇がつづき、ようやく五三九年に欽明天皇が即位します。その欽明一三年、つまり西暦五五二年に仏教が伝えられたというのです。これに対し、『上宮聖徳法王帝説』および『元興寺縁起』では、仏教の

公伝は戊午（ぼご）の年とされています。西暦でいえば五三八年にあたり、『日本書紀』の年代にしたがうと欽明天皇が即位する前のことになってしまいます。ところが、『元興寺縁起』には、それが欽明七年であると明記されています。欽明天皇の死は、どちらも西暦五七一年のこととなっているのですが、



［6－2］　6世紀の朝鮮半島

『日本書紀』が在位期間を三二年だったとするのに対して、『元興寺縁起』では四一年となっていて、継体天皇の死後すぐに欽明天皇が即位していたという計算になります。それでいけば確かに戊午の年は欽明七年にあたるわけです。ここから、五四〇年まで天皇が二人いて王朝が分裂・対立しており、欽明天皇に一本化されたのが五四〇年だったのではないかという説がとなえられることにもなりました。

これだけでは、いずれとも決着はできないのですが、僧侶の派遣や仏像・経典の贈与は何度もおこなわれており、五三八年が最初で、五五二年もその何回目かにあたっていたと考えることもできます。

どちらにしても、仏教伝来は朝鮮半島の情勢と密接な関係をもっていました。百済は高句麗と古くから対立を続けていましたが、四七五年に漢山城（いまのソウル）から熊津城（公州）へ都を移さねばならず、さらに南の泗沘城（扶余）へ遷都して建直しをはかったのが五三八年でした。これが仏教公伝の年とすれば、倭との同盟関係をあらためて確認する意味があったのでしょう。前章でみたとおり、こののち百済は五五一年に漢山城の奪回に成功しますが、翌五五二年には新羅によってこれを奪われ、五五四年に聖王自身が戦死する事態となります。五五二年に仏像が送付されたのだとすれば、新羅との対立のなかで、倭との関係を強化する意味をもっていたものと考えられます。百済と新羅との対立は、この間に加耶地方をめぐっても熾烈さを増しており、五六二年にはついに新羅による加耶併合となったのでした。

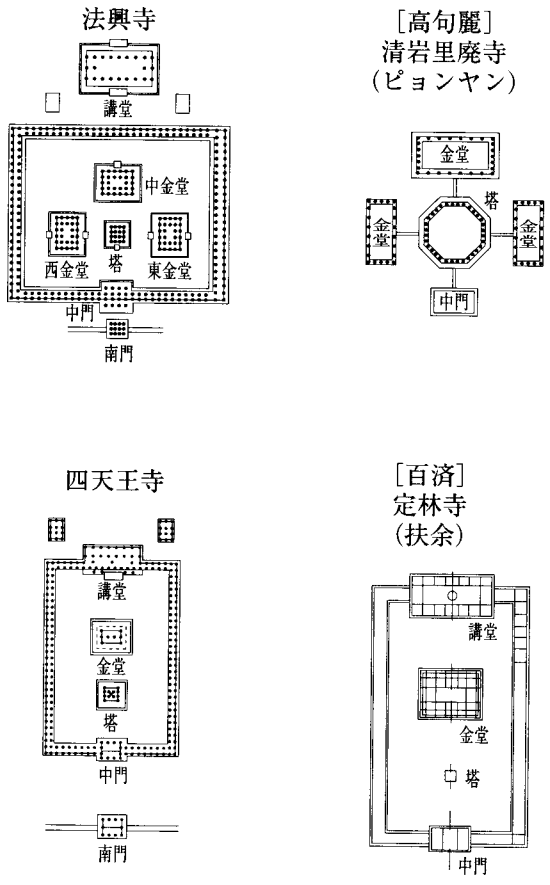
(2) 法興寺の建立

欽明天皇のもとで仏教の受容に積極的だったのが蘇我氏でした。蘇我氏は渡来人と関係が深く、朝廷の財政を担当して勢力を伸ばした氏族です。財政を担当するには、帳簿をつけたり複雑な計算をこなしたり、当時としては先端をいく知識が必要なわけで、渡来系の氏族との結びつきが不可欠だったと考えられます。仏教もそうした新しい文化と切り離せないものだったのです。仏教の受け入れに反対した物部氏とのあいだで、五八七年に戦争となりました。これに勝利した蘇我馬子（そがのうまこ）に支えられて、五九二年に推古天皇が即位し、翌年には聖徳太子が摂政となります。このような情勢のもと、蘇我氏の氏寺として建立されたのが法興寺でした。

法興寺の建立に百済の支援があったことはいうまでもありません。僧侶や寺工・瓦博士・画工などが派遣されてきました。それはともかく、法興寺建立をめぐって注目されるのは、高句麗とのかかわりです。このあと高句麗からは、仏像製作のため黄金三百二十両が贈られたといわれます。法興寺は奈良時代に平城京へ移転して元興寺となり、旧寺は現在までつづく飛鳥寺ですが、一九五六～五七年の発掘調査により、創建当時の法興寺の伽藍配置が明らかになりました。それは一つの塔を東西北の三つの金堂が取り囲むという、予想外の構造でした。すでに一九三〇年代に調査がおこなわれていたピョンヤンの清岩里廃寺の様式と同じものだったのです。同じ様式は、上五里廃寺や定陵寺など他の高句麗の寺院遺構でも確認されており、法興寺の建築様式が高句麗の影響を強くうけていたことがうかがえます。

五九六年に法興寺は完成しましたが、その前年には、高句麗から慧慈（ヘジャ）、百済から慧聡（ヘチョン）が来日しており、この二人が初代の住職となります。とくに、高句麗から派遣された慧慈は、六一五年の帰国まで日本に留まり、聖徳太子の仏教の先生であるだけでなく、政治・外交のブレーンとして重要な役割を担いました。聖徳太子が著わした『三経義疏』も、慧慈の指導のもとでの研究の成果というべき作品です。従来からの百済仏教の影響に加え、高句麗仏教の影響が加わることになったのです。

百済と激しく対立し、倭とも



[6－3] 法興寺の伽藍配置

対抗関係にあった高句麗が、なぜこの時期に倭との接近を図ったのでしょうか。高句麗がはじめて倭国へ使者を送ってきたのは五七〇年。五七二年とその翌年にも使者が来ます。そして、法興寺建立に際しては、高句麗が大きな役割を演じるまでになったわけです。

先述のように、六世紀には新羅が急速に成長して領域を拡大し、五五二年には高句麗や百済を破って西海岸地域に進出、海路により直接に中国と通交できるようになっていました。七八九年に隋が中国を統一すると、高句麗・百済・新羅は、それぞれ隋に朝貢して冊封をうけます。しかし、境を接する隋と高句麗のあいだの緊張はたかまり、五九八年にはついに隋の文帝が三十万の大軍を高句麗に差し向ける事態となりました。しかも、こうした情勢に呼応して、隋と良好な関係を築いた新羅が、高句麗の領土を脅かす動きをつよめます。

このような東アジアの情勢、朝鮮半島の動向のなかでの、高句麗と倭の接近です。六〇〇年に倭が出兵して新羅と戦った記事がありますが、さらに六〇一年、倭は高句麗・百済に使者を派して新羅攻撃の協議をしています。そして六〇二年には、聖徳太子の弟にあたる来目皇子（くめのみこ）を将軍として二万五千人の軍隊を新羅遠征にむかわせようとしました。筑紫まで行ったところで来目皇子が病死したため、今度は、やはり太子の異母兄にあたる当麻皇子（たいまのみこ）を将軍にしましたが、これも妃の死亡によって計画は中断せざるをえませんでした。同年に百済が新羅領に侵入し、翌六〇三年には、高句麗が新羅によって占領されていた北漢山城を攻撃します。倭と高句麗・百済のあいだには、連携ができていたようにみえます。

(3)　遣隋使の派遣

聖徳太子の外交の目玉というべき遣隋使の派遣も、こうした動きのなかで実施されたものでした。中国側の記録『隋書』によれば、第一回目の遣隋使派遣は六〇〇年となっています。『日本書紀』にまったく出てこないのは、この遣使が失敗だったからなのでしょう。『日本書紀』が最初の遣隋使としているのは、六〇七年の小野妹子です。例の「日出る処の天子、書を日没する処の天子に致す」云々の国書を持参します。国家的自立の気概を示したとして、さかんに強調される文書ですが、なぜか『日本書紀』には出てこないで、『隋書』にのせられています。煬帝は「無礼」だとして不快感を示しますが、帰国する妹子とともに裴清世を派遣しました。倭王はよろこんで、「我聞く、海の西に大隋礼義の国有りと。故に朝貢せしむ。我は夷人。海隅に僻在して礼義を聞かず」と述べたというのが、『隋書』の記述です。

煬帝が怒ったのは、「日出ずる処」と「日没する処」に価値の優劣があったからではありません。これは、当時の中国の文献での使われ方からみても、東と西という方角を示すだけのようです。問題は、世界の中心にただ一人君臨するはずの「天子」を名のっていること、しかも蕃夷の小国にすぎない倭が「天子」を名のっているからにほかなりません。たしかにこの国書は、中国皇帝にまねていま一人の皇帝たろうとする志向を示す内容のものだったといえます。

しかし、なぜ、緊迫した情勢のなかで、あえて隋を怒らせるような使節をおくらなければならなかったのでしょう。どうして、そのようなことが可能だったのでしょうか。新羅が隋に接近して、高

句麗が隋と新羅に挟撃され、一方で倭が高句麗・百済と連携して新羅への遠征を実施しようとした。わざわざ相手を刺激するような国書をもった遣隋使は、まさにこうした国際情勢の中で派遣されました。そこに聖徳太子の外交ブレーンだった慧慈、したがって高句麗の戦略が反映しているのではないか、という見方もあります。尊大な態度の倭を意識させることによって、隋の高句麗攻撃を牽制しようとしたとみるわけです。

百済のほうは同じ六〇七年に、使節を派遣して「高(句)麗を討つことを請う」と隋に迎合するようなそぶりをみせますが、隋はこれを「内に高(句)麗と通和し、詐を挟み以て中国を窺う」ものと警戒しています。各国とも表裏両面で合従連衡、なかなかしたたかな外交がなされていたことはたしかなようです。身のほどをわきまえない無礼な使節にもかかわらず、煬帝が大目に見て国交を成立させたのは、倭が高句麗と結ぶのを恐れたからでした。対等な国家としての気概を示したといわれる「日出る処の天子」の国書ですが、それが可能だった背景に、高句麗の隋への対決の気概があったことを見落としてはならないでしょう。隋の高句麗攻撃は六一二年および六一四年にも強行されますが、高句麗は乙支文徳(ウルチムンドク)将軍らの活躍でこれを防ぎきり、逆に隋の方が高句麗遠征の失敗をひきがねにして、滅亡することになります。

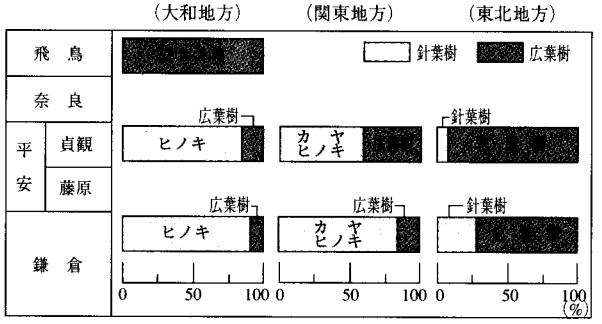
(4) 二つの弥勒菩薩像

遣隋使の派遣は、緊張した東アジア世界のなかで、倭にとっては隋との関係を確保する契機となり、

［6－4］　二つの弥勒菩薩像
（左）韓国国立中央博物館蔵、（右）広隆寺蔵

また、新羅との関係を好転させるきっかけにもなりました。こののち、仏教においても、新羅仏教との交流がつよまっていきます。

新羅仏教との関係を象徴するのが、京都・太秦にある広隆寺の弥勒菩薩像です。片脚を組み、右手の指をほおにあてて思索にふける独特のポーズをとった半跏思惟像で、微笑をたたえた表情は飛鳥時代の仏像のなかでもひときわ高い人気をあつめています。飛鳥美術の代表的な作品として、第二次大戦後の新制度のもとで彫刻部門の国宝第一号に指定されました。ところが、これにそっくりな半跏思惟像が韓国にもあります。ソウルの国立中央博物館に所蔵されている金銅弥勒菩薩像です。ソウルのほうは金銅製で金箔が施され、広隆寺のは木製。ソウルの半跏像がややふくよかな感じなのに対して、広隆寺のものはほっそりした印象なのですが、それにしても、うりふたつといっていいほどよく似ています。



［6－5］ 仏像の用材

（小原二郎ほか『美の秘密～二つの弥勒菩薩像』より）

広隆寺は、『日本書紀』によると、推古一一（六〇三）年に渡来系氏族の秦河勝（はたのかわかつ）が聖徳太子から仏像を受けて開寺したといわれ、この弥勒像が太子から下賜されたものだと考えられてきました。しかし、この仏像がアカマツで作られていたことが判明し、だれが、どこで作ったものなのかが改めて問題となりました。というのは、飛鳥時代の仏像は、ほとんどがクスノキで作られており、平安時代以降になるとヒノキ製がおおくなるという用材の流れが明らかにされてきたからです。マツで作られた広隆寺の弥勒像はきわめてまれな例外ということになります。木材が豊富な日本では、加工にむかないマツは使用されませんでした。日本の国宝第一号が、実は日本製ではないのではないか。『日本書紀』には、聖徳太子が死んだあと推古三一（六二三）年に、新羅から仏像が送られて広隆寺に安置されたという記事があります。この弥勒菩薩像も、朝鮮半島で作られたものではないかとする見解が有力になったのです。

一方、韓国にある弥勒像は、一九一〇年の韓国併合ののち日本人の手でソウルへ運びこまれたものといわれます。この時期、朝鮮の各地では、一攫千金を狙った日本人により、好ましからぬ手段で多くの美術品が持ち出されていました。問題の仏像もそのひとつで、何処から搬入されたのか正確には不明のままです。ただ、弥勒信仰はとりわけ新羅でさかんとなり、出所のわかっている現存の半跏像のうち、大型のもののほとんどが新羅製とみられています。広隆寺の弥勒像も、新羅で作られて日本へもたらされた可能性が高いといえるでしょう。新羅における半跏思惟像の様式の変遷の中に位置づけると、どちらも共通の祖型から生まれた兄弟の関係にあるとする見解もあります。

広隆寺の弥勒菩薩像は明治中期に大規模な修理がおこなわれ、そのとき鼻筋がとおり目がはっきりしたものになったともいわれます。とすれば、修理のまえには、もう少しふっくらした顔立ちだったはずで、いま以上に、ソウルにある弥勒菩薩像によく似ていたことになるのでしょうか。しかも、広隆寺の弥勒像も、もとは金箔が付されていたのだそうです。

いずれにしても、飛鳥仏教が百済・高句麗だけでなく、新羅仏教とも深い関係をもっていたことを、ふたつの弥勒菩薩像が物語っています。飛鳥仏教にみられる朝鮮三国の仏教とのつながりは、倭国の外交的な模索の反映でもあったのです。

第7章　大化の改新と白村江の戦い

(1) 唐の建国と東アジア

聖徳太子の時代にはじまった七世紀の倭国では、大化の改新をへて権力の集中がめざされ、天武・持統天皇の時期にいたって律令体制が確立することになりますが、この過程は東アジア世界の動向と密接な関係をもっていました。

高句麗遠征の失敗をきっかけとして隋が滅亡すると、中国では六一八年に創建された唐が全土を掌握し、律令制度にもとづいて、いっそう強力な国家体制をととのえました。朝鮮三国はあいついで使いをおくり、唐の冊封をうけます。しかし、隋代にひきつづいて、高句麗と唐との緊張は解消せず、高句麗は十数年をかけ唐の攻撃に備えて長城を築きました。六三〇年に北方の東突厥を滅ぼすと、唐は本格的に高句麗への圧力をつよめます。この年、倭も第一回の遣唐使派遣にふみきりました。ところが、六三二年に派遣されてきた唐使高表仁は、倭と「礼を争」って帰国したとされており、関係の構築は不調に終わったようにみえます。唐から高句麗攻撃への協力を求められたとの見方もあります。

緊迫した東アジア情勢のもとで、外交路線の選択をせまられる状況となっていたわけです。

大唐帝国の出現という事態を前に、六四〇年代には、東アジア諸国でそれぞれ国内体制を強化する動きが生まれます。唐の圧迫が激しさを増しつつある六四二年、高句麗では泉蓋蘇文（チョンゲソムン）がクーデターで権力をにぎり、唐への対決姿勢をいっそう鮮明にしました。この前年には、百済でも義慈王（ウィジャ）が反対派を一掃して権力を集中する政変がおこっています。そして、六四二年になると、みずから大軍を率いて新羅への侵攻をおこないました。新羅はこれに対して、金春秋（キムチュンジュ）が高句麗に乗り込み、同盟関係をむすんで百済への攻撃をおこなうようよびかけますが、泉蓋蘇文に拒否され、逆に抑留されてしまいました。金春秋を危うく救出すると、新羅は六四三年に唐へ使者をおくり、高句麗・百済の不当性を訴えて救援を要請するという行動に出ます。

唐は、ついに四六五年、大軍を動かして高句麗への攻撃を開始しました。新羅は、これに呼応して数万の軍を高句麗にむかわせます。百済は、そのすきに新羅に奪われていた諸城の奪回を図りました。倭国で、いわゆる大化の改新がおこなわれたのは、まさに唐の遠征軍が高句麗攻撃をおこない、朝鮮三国の攻防が激しさをましているときでした。唐の第一回高句麗遠征は失敗したものの、さらに六四七年に二回目、六四八年に三回目と、攻撃がつづけられます。このなかで、新羅では、唐に対する外交路線をめぐって有力貴族の毗曇（ビダム）らによる反乱事件が発生しますが、金春秋らはこれを鎮圧して権力の集中をすすめました。六四九年には服装制度を唐風にあらため、その翌年には唐の年号を採用するとともに、唐にならった官制改革を断行していきます。

(2) 改新政府の外交政策

唐の大軍による高句麗攻撃がおこなわれていた六四五年、倭国でおこったのが大化の改新でした。このクーデターも、朝鮮三国でそれぞれにおこなわれた王権強化の動きと同様の性格をもったものだと考えられます。中大兄皇子を中心としたグループにより、宮中で蘇我入鹿（そがのいるか）が暗殺され、父親の蝦夷（えみし）が自殺して、権勢をほこった蘇我本宗家が滅亡しました。孝徳天皇が即位し、中大兄皇子自身が皇太子となります。蘇我氏と関係が深かった古人大兄皇子は、入鹿が殺害されたあと私宅にもどり「韓人、鞍作臣（入鹿）を殺しつ。吾が心痛し」と口走ったといわれ、『日本書紀』の編者は「韓政に因りて誅せらるるを謂う」と注記しています。「韓政」が、字義どおり対韓政策のことなのか否か、意味のよくわからない言葉なのですが、すでにみてきたとおり、当時の倭国は緊急に外交路線の確定をせまられる情勢にありました。唐による高句麗攻撃がさしせまるなかで、高句麗や百済から使節が派遣されてきており、倭国からも高句麗・百済・新羅へ使節が派遣されたと記録されています。そして、たしかに、改新を前後して外交政策に変化があらわれているのです。

伝統的な倭の外交が親百済政策を基軸にしてきたことはまちがいありません。ところが、改新政府は急速に新羅との関係を深めていったようにみえます。遣隋使に従って留学、唐から新羅を経由して帰国し改新に大きな力を尽くした高向玄理（たかむこのくろまろ）が、六四六年に新羅へ派遣され、翌六四七年には新羅から金春秋が来日しました。さらに金春秋は、六四八年に唐へ渡りますが、このとき改新政府は唐への親書を託しています。大化年間の新羅との使節往来は、百済とのそれを凌駕しており、改新政府の外交は唐および新羅との関係を重視する路線に傾いているように思われます。六五三年には久々に第二回目の遣唐使を派遣し、翌六五四年にも高向玄理・恵日を第三回遣唐使として派遣しました。唐は、高句麗・百済が新羅を侵略していると非難し、倭国に対して新羅救援を要請したともいわれます。改新政府は、いっそう明確な対応を迫られるわけです。

こうした、改新政府の新羅・唐への接近策の一方で、たとえば六五一年に新羅からの使者が来た際、唐服を着ているのをみて、左大臣の巨勢徳陀（こせのとこだ）が「いま新羅を伐たねば悔いをのこすことになる」と奏請するなど、親百済の意見も根強く存在していたようです。外交路線をめぐって、倭国の内部で対立があったことがうかがえます。

ところで、大化の改新については、改革の存在自体を疑う見解も根強いものがあります。『日本書紀』では、改新が中大兄皇子を中心にして、はじめから律令国家体制をめざす整然とした計画に従って実行されたように描かれています。しかし、蘇我氏打倒のクーデターがあったことは事実としても、改革の方向を明確に示す「改新の詔」がこの時点で本当に出されたとは思えません。その主体についても、孝徳天皇が中大兄皇子の傀儡的な存在にすぎなかったのかどうかは疑問の余地があります。孝徳天皇の役割がもっと大きかったとも考えられるのです。六五三年に中大兄皇子は、孝徳天皇を難波京にのこしたまま飛鳥へもどってしまいました。翌六五四年、孝徳天皇は難波宮で淋しく死亡し、四年後にはその子の有間皇子が粛清されるわけですが、改新政府も一枚岩だったのでなく、内部に対立をはらんでいたということでしょう。六五五年、中大兄皇子は改新のときに退位していた母親の皇極天皇を再び即位させて斉明天皇としました。

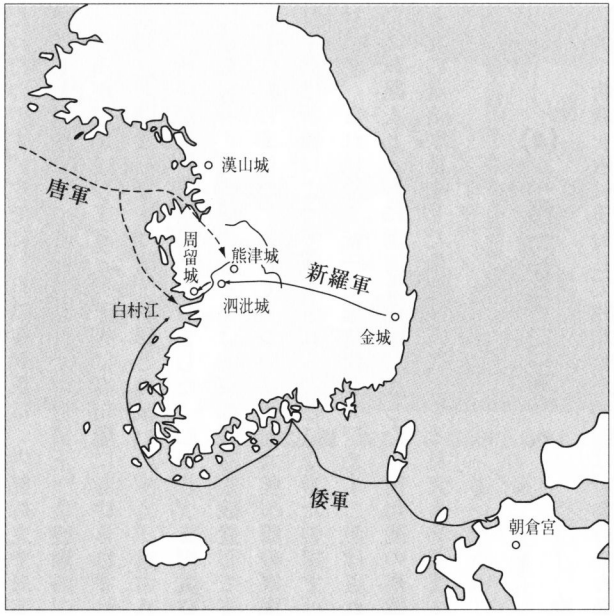
こうした、孝徳天皇と中大兄皇子との対立が、はたして外交路線の違いと関係しているのかどうか。前者を親新羅、後者を親百済路線とする見解がある一方、逆の見方をする研究もあります。いずれにせよ、唐・新羅との協調の傾向にあった改新以来の外交は、中大兄皇子が飛鳥へもどり、孝徳天皇が死亡したあと、急速に百済よりの路線に回帰していきます。六五七年に新羅に対して唐への取り次ぎを依頼したものの断られ、六五九年に派遣した第四回遣唐使は、そのまま唐の都長安に抑留されてしまいました。すでに唐および新羅と、百済・高句麗の対立は回避できない情勢になっていたのです。

(3)　統一新羅と渤海

六五九年、百済が新羅領に侵入すると、新羅は唐への働きかけをつよめました。ついに唐は、高句麗への作戦を視野にいれながら、先に百済をたたくべく軍勢をさしむけます。六六〇年のことでした。唐の水軍は錦江を遡り、新羅の武烈王はみずから五万の兵を率いて東方から、ともに百済の王都泗沘城（扶余）をめざします。武烈王は、若き日の金春秋その人で、激動する東アジア情勢に巧みに対応しながら、朝鮮半島統一への戦いの火蓋をきったのでした。

唐と新羅に攻められて泗沘城は陥落し、旧都熊津城（公州）へのがれた義慈王が降伏して、百済は滅亡します。義慈王は唐の都長安へ連行され、まもなく死亡しました。ところが、百済王族のひとり鬼室福信を中心に、各地で百済再興をめざす勢力が蜂起し、戦闘が継続することになります。鬼室福信は、倭国に援軍を要請するとともに、倭国にいた義慈王の子の余豊璋に帰国するよう求めました。

中大兄皇子はこれに応えて出兵することを決め、斉明天皇とともに難波を出発して九州の筑紫に移ります。この地で、六六一年に斉明天皇は死んでしまいますが、中大兄皇子はさらに出兵の準備をすすめ、余豊璋に織冠を授ける儀式をおこなったあと、五千余の軍勢をつけて百済へ帰還させました。鬼室福信はこれを迎え、余豊璋を百済王に推戴します。余豊璋は、錦江下流沿岸にある周留城に拠って抗戦し、倭国は六六三年、上毛野稚子を将軍とする二万七千の軍勢を増派しました。



［７－１］　白村江の戦い

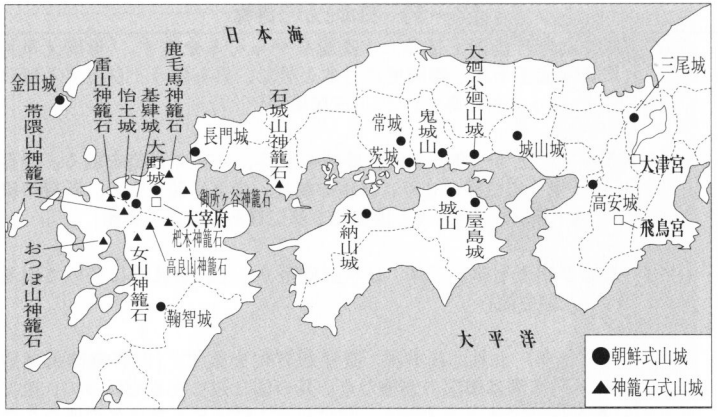
周留城をめざす倭軍に対し、唐の水軍百七十艘は錦江河口を封鎖して待ち構え、陸上では武烈王のあとを継いだ文武王の率いる新羅軍が唐軍とともに布陣しました。倭軍は各部隊が先を争って攻撃しますが、そのたびに撃破されました。『旧唐書』は、「倭兵と白江の口に遇う。四戦して捷つ。其の舟四百艘を焚く。煙焔は天に漲り、海水は皆赤し。賊衆大いに潰ゆ」と記しています。倭軍の大敗北

だったのです。すでに、百済復興軍は、内部対立で鬼室福信が殺されており、周留城も陥落してしまいました。倭によって冊立された「百済王」余豊璋の、その後の消息はわかっていません。

百済が亡んでしまうと、矛先は高句麗にむけられました。その高句麗では、泉蓋蘇文が死ぬと、内部対立が強まります。唐・新羅との戦いのすえ、六六八年、ついに高句麗は滅亡し、朝鮮三国の抗争は、新羅が制する結果となりました。しかし、まだ戦いはおわりません。唐は滅ぼした百済の地には熊津都督府、高句麗のあとには安東都護府を設置して支配しようとします。新羅は六七一年、唐との戦争に転じました。そして、ついに六七六年、唐の軍隊を朝鮮半島から駆逐するのに成功します。朝鮮半島は新羅によって統一されることになったのです。それまでの高句麗・百済・新羅の三国時代に対して、これ以降を統一新羅時代とよびます。滅ぼされた高句麗の遺民の一部は北に移り、六九八年には靺鞨人とともに渤海を建国しました。高句麗の継承国家だとも称しており、この時代を南の新羅と北の渤海が併立した南北国時代とする見方もあります。

(4) 「倭」から「日本」へ

唐・新羅を敵にまわして敗北した倭国は、たいへんな緊張につつまれます。翌六六四年、対馬・壱岐・筑紫に防人と烽火がおかれ、筑紫には太宰府防衛のため水城がもうけられました。六六五年からは、筑紫・長門をはじめ各地に山城がつくられていきます。いまでも跡が残っているこれら朝鮮式山城は、亡命した百済の人びとの技術によるものとみられます。六六七年、中大兄皇子は近江大津京に



［７－２］　**朝鮮式山城**（森公章『「白村江」以後』より）

都を移し、翌六六八年、正式に即位（天智天皇）しました。この年に近江令が作られたといわれ、六七〇年には庚午年籍が作成されます。白村江で敗北したあとの緊張のなかで、国家体制の構築が企図されたものといえるでしょう。

ただし、唐・新羅は高句麗との戦争をひかえて倭との関係に配慮せざるをえず、さらには唐と新羅の戦闘がはじまったため、倭国の危機は回避される格好になりました。六六五年および六六九年には、第五・第六回の遣唐使が派遣され、新羅との関係も修復されていきます。

こうしたなかで、国内では、天智天皇が死ぬと、六七二年、後継をめぐって壬申の乱がおきます。この戦いは、大化の改新のような宮中クーデターとはちがって、二つの陣営が正面から武力対決した内乱であり、これに実力で勝利した大海人皇子が即位しました。この天武天皇と、皇后であとを継いだ持統天皇の時代に、律令制度が確立することになります。律令制度は中国から導入されるわけですが、その確立期である天武・持統朝期には、遣唐使は派遣されていません。六六九年のあと、次の第七回遣唐使が派遣さ

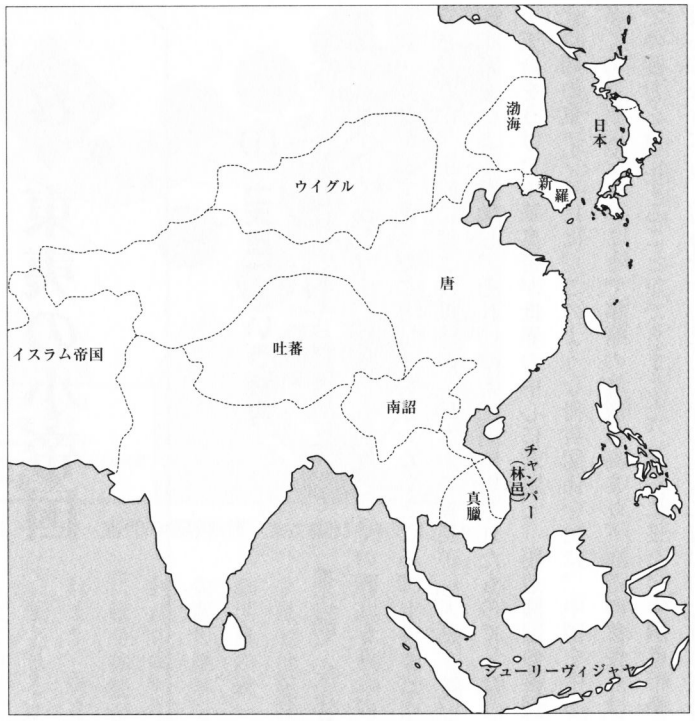
［７－３］　日本という呼称

670年	（咸亨元年）倭国王遣使し、高麗を平らぐるを賀す。［冊府元亀］ （新羅文武王十年）倭国更に日本と号し、自ら言う、日出ずる所に近く、以って名と為す、と。［三国史記］
671年	（新羅文武王十一年）此時、倭國の船兵、来りて百済を助く。倭船千艘、停りて白沙に在り、百済の精兵、岸上に船を守る。新羅の驍騎、漢の前鋒と為る。［三国史記：薛仁貴あて文武王書簡］
698年	（新羅孝昭王七年）三月、日本国使至り、王、崇礼殿に於いて引見す。［三国史記］
702年	（大足二年）十月、日本国、遣使し方物を貢す。［旧唐書則天皇后紀］＊日本国は倭国の別種なり。其の国日辺に在るを以って、故に日本を以って名と為す、と。或は曰う、倭国自ら其の名の雅ならざるを悪み、改めて日本と為す、と。或は云う、日本は旧小国、倭国の地を併せたり、と。其の人、入朝する者、多く自ら矜大、実を以って対えず。故に中国焉れを疑う。［旧唐書日本国伝］

（注）『三国史記』文武王10年の記事は、『旧唐書』などによって加えられたものとみられる。

れるのは、七〇一年に大宝律令が制定された翌年のことでした。律令制度は唐のそれを学んだものであるにはちがいありませんが、肝心の天武・持統朝の時期に、実は遣唐使は一度も出掛けていなかったのです。一方でこの間、新羅との使節の往来は頻繁におこなわれており、律令の導入にとって新羅との関係がきわめて重要だったことをうかがわせます。

ともあれ、七〇二年の遣唐使は、律令国家としての確立を背景にしたものであったわけですが、この使節は唐へ行ってはじめて自らを「日本」の使者だと名のりました。『旧唐書』によれば、唐側はこれをいぶかって問いただすものの、その答えが要領をえなかったと記しています。これまでの倭を滅ぼして新たにたてられた王朝なのか、単に名を改めたものなのか。新羅との関係においても、『三国史記』によれば、六九八年の記録に「日本国の使い至る」と書かれています。まさに、



［７－４］　唐代の東アジア

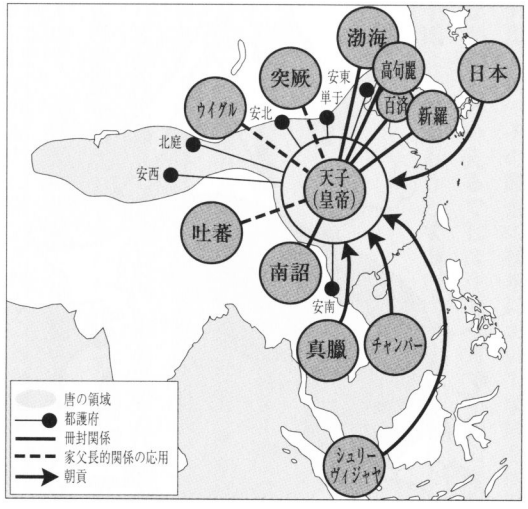
この時期に、「日本」という名称が使用されるようになったことがわかるのです。唐を中心とし、周辺に渤海・新羅・日本が並び立つ東アジア世界の輪郭が完成したものとみていいでしょう。

第8章 東夷の小帝国

(1) 「天皇」という称号

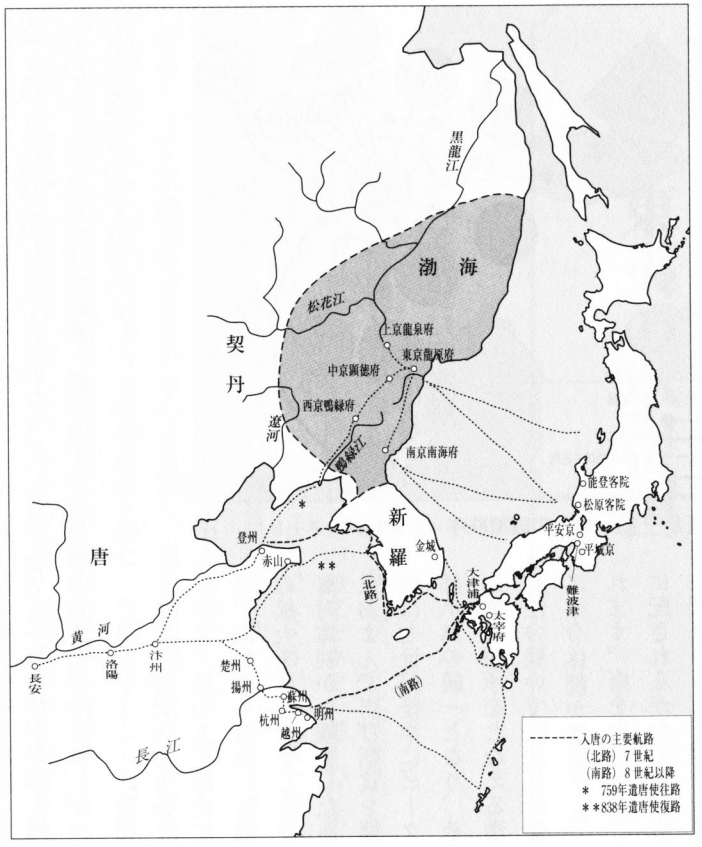
「天皇」という称号が成立した時期に関しては、推古朝、大化改新期、天智朝など、さまざまな見解があります。しかし、すくなくとも制度としての確立をみたのが、「日本」の成立する七世紀後半、天武・持統朝期であったことはまちがいないところでしょう。これまで倭王を便宜的に天皇とよんできましたが、正確にはこれ以降の「日本」の首長が「天皇」ということになります。この称号は、中国皇帝をつよく意識し、それに準えて創り出されたものでした。

天命をうけた中華皇帝が世界の中心に君臨し、周辺諸国の首長はこれに朝貢して爵位を授かる。漢代以降の東アジアには、このような冊封関係を軸に、中国を中心とした国際秩序が形づくられます。多くの冊封国をもつことで皇帝の権威は高まり、周辺の首長らは冊封をうけることによって支配地域での権力を強化することができました。さらにまた、中国皇帝から冊封をうけて君臣関係を結んだ首長らのなかにも、自らを中心としてその周辺に擬似的な冊封関係を設定しようとする志向がみられます。いちはやく高句麗の「太王」にそれがあらわれるのは、広開土王碑文の「百済・新羅は旧是れ属民」という言葉が示しているとおりです。新羅王などにも同様の志向を確認することができ、倭の「大王」がしきりに百済や新羅・任那などの支配権を含めた称号をほしがったのも、同じことのあらわれとみてよいでしょう。



［8－1］ 唐代の国際秩序（東京書籍『世界史B』より）

これまでにみてきたとおり、奴国王や卑弥呼につづき、倭の五王時代に冊封体制に参入した倭国は、高句麗・百済・新羅などと競合しながら勢力の拡大をはかりました。そして、六世紀になって冊封体制から離脱したあと、隋唐帝国が出現するにおよんで再び朝貢を開始します。東夷諸族の抗争は七世紀後半にピークをむかえて新羅による朝鮮半島の統一となり、その北方には、滅亡した高句麗の継承をとなえる渤海が建国されました。白村江の戦いで敗北した倭国では、天武・持統朝期に律令体制が構築され、「日本」の国名が採用されます。唐を中心とし、渤海・新羅・日本が周辺に配されるかたちで、古代の東アジア世界が完成したということができます。



［8－2］ 唐・新羅・渤海との交通

そうした東アジア世界の展開のなかで創出されたのが、「日本」における「天皇」でした。それは、中国の東方にいまひとりの皇帝たろうとする称号として設定されたものです。中華帝国のミニチュア版をつくろうとする志向を体現した称号が天皇でした。令の規定では、「祭祀に称する」のが天子、「詔書に称する」のが天皇、「華夷に称する」のが皇帝、

「上表に称する」のが陛下という称号であるとされています。

天皇すなわち皇帝とは、夷狄を服属させて天下に君臨する存在にほかならず、皇帝である以上は朝貢国が存在しなければなりません。日本列島内の夷狄として蝦夷や隼人を位置づけるとともに、朝鮮半島の諸国家が朝貢国として設定されます。令の規定では、唐を「隣国」すなわち対等な国家とする一方、新羅が「蕃国」とされており、おくれて国交をひらく渤海も、同様の規定となったはずです。天皇とは、その概念の根本において朝鮮を服属させた存在なのであり、朝鮮を従えない天皇はありえなかったといえるでしょう。一方で中国に対して従属的な位置にたちながら、他方で朝鮮諸国には宗主国として臨もうとする古代の日本のありようを、石母田正は「東夷の小帝国」と表現しました。

(2) 『日本書紀』

このような天皇、つまり朝鮮服属を不可欠の要素とした天皇称号が創出された時期というのは、倭（日本）の王権のおよぶ範囲が最終的に日本列島内に限られることが決定した時期でもありました。これまでの倭は、中国の東方世界において、高句麗・百済・新羅さらには加耶諸国などと競合・対立しながら活動してきました。東夷世界を活動領域とし、東夷諸族のひとつとして、ときには朝鮮半島にも足跡をのこしてきたわけです。ところが、白村江の戦いで敗れ、新羅が統一を実現したことによって、倭は朝鮮半島での活動の余地がまったくなくなってしまいました。王権の活動領域が、最終的に日本列島内に限定されることが確定したということができます。こうした時期に、朝鮮諸国の服

属を不可欠の要素とする「天皇」号が創設されたのでした。したがって、それははじめから虚構をともなわざるをえません。なによりも、歴史的に、朝鮮諸国が天皇の徳を慕って朝貢してきていたという物語をつくりあげなければなりませんでした。

天武天皇は、律令制定の命令とほぼ同時に歴史書の編纂を命じますが、それは七二〇年に『日本書紀』として完成します。これが、天皇統治の正統化のための歴史書であることはいうまでもありません。朝鮮にかかわる神功皇后の三韓征伐や任那日本府の話は、たんなるエピソードでなく、そうした『日本書紀』の根幹にかかわる意義をもつものでした。天皇が天皇であるために、朝鮮諸国の服属の歴史が絶対に必要なことだったわけです。

倭国と高句麗・百済・新羅や加耶諸国との間には密接な交渉が存在し、時には倭が優勢となり、ある場合には倭が劣勢になったりということを繰り返してきたはずです。『日本書紀』は、これを倭が一貫して服属させ、朝貢させ、任那には日本府をおいて直接支配していたかのように描き出します。このような「日本」創出にかかわって作り出された物語が、その後の朝鮮観を規定しつづけるのであり、したがって、その背後にある古代の日朝関係の実像にせまる課題が重要なものになるのだといえるでしょう。

それはともかく、朝鮮諸国とのあいだで、冊封関係の設定が具体的に日程にのぼったのは、六六三年の白村江の戦いの際のことでした。中大兄皇子は、日本にいた百済の王子余豊璋（ヨブンジャン）に軍隊を付して帰還させるとき、織冠を授けて臣下とします。そして、百済故地へもどった余豊璋は、百済王即位の儀式をおこないました。倭王の臣下たる人物が百済王となったわけで、百済王は倭王に冊立されたこ

［8－3］　遣唐使

次数	出発	帰着	備考
①	630	632	犬上御田鍬。唐使高表仁を伴って帰国。
②	653	654	北路。
③	654	655	高向玄理。北路。
④	659	661	朝鮮半島南端から直接に大洋を横断。対百済開戦で唐に抑留。
⑤	665	667	旧百済領駐留の唐軍に唐使劉徳高を送る。
⑥	667	668	旧百済領駐留の唐軍に唐使法聡を送る。
⑦	669	？	高句麗の平定を賀す。
⑧	702	704	「日本」を名のる。
⑨	717	718	留学生安倍仲麻呂入唐。
⑩	733	734	遭難した平群広成らは渤海経由で帰国。
⑪	746		中止。
⑫	752	753	争長事件。藤原清河帰国できず。
⑬	759	761	渤海経由で入唐。藤原清河帰国の目的は果たせず。
⑭	761		中止。
⑮	762		中止。
⑯	777	778	唐使趙宝英を伴って帰国。
⑰	779	781	唐使を送る。
⑱	804	805	空海・最澄入唐。
⑲	838	839	円仁入唐。新羅船を雇い山東半島をへて帰国。
⑳	894		菅原道真の上奏で停止。

（注）⑦までは主として北路、⑧からは南路ないし西南諸島経由（南島路）が中心になった。

とになります。このような、朝鮮の王を冊封する皇帝への志向にこそ、大軍を派遣した根本的な理由があったものと思われますが、もちろんのこと、それは失敗におわってしまいました。亡命してきた余豊璋の弟善光（ソングワン）に「百済王（くだらのこにきし）」の姓を与え、日本国内に住まわせます。日本天皇が百済王を臣下として従えているという虚構をつくりだすことで満足するしかなかったのです。

(3)　「隣国」唐との関係

律令が「隣国」すなわち対等な国家と規定する唐との関係は、実際のところどのようなものだったのでしょうか。いうまでもなく、唐には遣唐使が派遣されましたが、「隣国」にふさわしく、対等な

外交使節であったかのように描かれています。

しかし、それはあくまでも日本側の記述においてだけであり、唐の側では「朝貢使」と呼んで、扱いも基本的に他の朝貢使節と変わりありません。七五二年に派遣された藤原清河は、唐の朝廷での朝賀の儀式の際、席次が新羅よりも低かったことに抗議する「争長事件」をおこしています。日本の抗議で上席にかわったものの、唐からみた評価はそのようなものだったわけです。

遣唐使が、はたして国書を持参したのかどうかは、理解がわかれるところです。日本側の記録には国書のことがまったく出てきません。持参するとすれば、君臣関係を示す上表文の形式しかなかったから、それを避けるために持っていかなかったともいわれます。そうではなく、国書を持っていったのだけれど、対等性を繕うために歴史書がそれを秘しているのだとの見方もあります。近年の研究は、国書の存在をみとめる方向にありますが、その場合、どのような形式のものだったのでしょうか。

『冊府元亀』にある七三五年の玄宗の勅書には、「日本国王主明楽美御徳（すめらみことと）に勅す。彼は礼儀の国にして、神霊の扶くる所なり」云々とあります。臣下に下す一般的な勅書の形式ですが、そこには、おまえの国は「礼儀の国」だとかかれています。先の聖徳太子が派遣した遣隋使に煬帝が不快感を示した理由は、「日出る処の天子」云々の国書が「無礼」だというものでした。今回の玄宗勅書が、「礼儀」をわきまえているというのは、すなわち正しい形式の国書を持ってきたということのようにおもわれます。上表形式だったか否かはともかく、煬帝を怒らせた「書を致す」という対等な形式の国書でなかったことだけはたしかなことといえるでしょう。

また、玄宗勅書には、「日本国王主明楽美御徳に勅す」とかかれています。当然のことながら、中

国皇帝が、いまひとりの皇帝たる「天皇」をみとめるはずはなく、「日本国王」と呼んでいるのですが、問題は「スメラミコト」を固有名詞と誤認しているらしいということです。どうやら、遣唐使が持参した国書は、中国に対し正面きって自らを「天皇」と名のることはできず、唐側が誤解することをみこし、こっそり和名のスメラミコトを使って自己満足するしかなかったようにみえます。

唐との関係は、実際に唐の使者が来日したときに、もっとも鋭い問題となりました。七七八年に来日した唐使趙宝英を迎える儀式に関して、ある貴族の記録には、「彼（唐）は大、此（日本）は小、須く藩国の儀を用うべし」との主張に、「海外の一个使を畏れて、万代楷定天子の号を降ろさんと欲す、是れ大不忠不孝の言なり」とやりあうさまが描かれています。そして、結局、天皇が「御座を降り」て応対したことが、批判的にかかれています。御座をおりるとはどういうことなのか。唐の使者が藩属国へ派遣された場合、あくまでも皇帝の代理として北側に位置して南面するものとされていました。天皇はもちろん国内では北側に座して南面して臣下に対応するわけですが、この御座を降りて唐使にゆずり、自らは臣下の位置である南側へ回ったということでしょう。「隣国」唐との関係も、現実はこのようなものだったのでした。

(4) 「蕃国」新羅・渤海との関係

唐に対しては使えなかった「天皇」の称号を、「蕃国」たる新羅や渤海に対しては用い、中国皇帝が下す詔書と同様の形式の文書を発給します。「天皇敬問新羅王」「天皇敬問渤海王」ではじまる文書

[8－4]　新羅との交渉

年代	派遣	来日
660	1	2
670	3	10
680	3	9
690	2	5
700	3	4
710	3	2
720	2	3
730	2	3
740	1	2
750	2	1
760	0	4
770	1	2
780	0	0
790	1	0
800	3	0
810	0	0
820	0	0
830	1	0
840	0	0

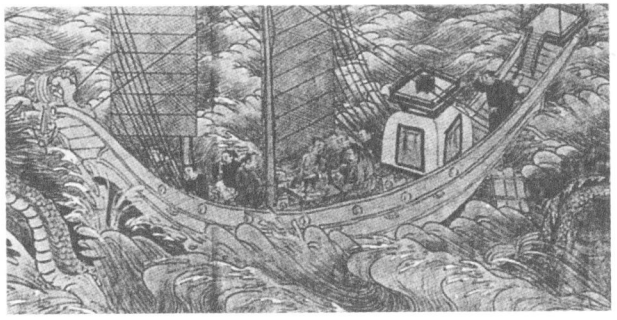
『三国史記』には、このほか、701、742、806、808、808、878、882年の日本使節到着が記録されている。

[8－5]　渤海との交渉

年代	派遣	来日
720	1	1
730	0	1
740	1	0
750	1	3
760	3	1
770	3	5
780	0	1
790	3	2
800	0	1
810	1	4
820	0	4
830	0	0
840	0	2
850	0	1
860	0	1
870	0	2
880	0	1
890	0	2
900	0	1
910	0	1

の形式です。そして、新羅や渤海からの使者に対しては、上表文の持参を要求しました。これが、「日本」「天皇」を名のる七世紀から八世紀への世紀交替期に強まったのです。「新羅国、来りて朝庭に奉ずるは、気長足媛皇太后、彼の国を平定したまいしより始めて、以て今に至るまで我が蕃屏たり。……今より以後、国王親ら来りて、宜しく辞を以て奏すべし」などというように、神功皇后以来、新羅が朝貢国であったという理由をつけて、それを要求するわけです。

当然のことながら、新羅・渤海はこれに抵抗し、トラブルがおこってきます。とりわけ、唐との関係が好転した新羅は、日本からの詔書の受け取りを拒否し、再三の要求にもかかわらず、ついに上表文を持って来ることはありませんでした。しかも、七三四年に来日した新羅使は、自らを「王城国」の使者と名のって自尊心を示し、七四三年には持参した品々を「土毛」と称して日本を蔑視する姿勢をとります。このため、日本からの使者は詔書を渡すことができず、新羅からの使



[8－6]『華厳縁起』に描かれた新羅船

者は毎回のように追い返すことになります。

新羅や渤海を「蕃国」とみなし宗主国として臨もうという理念が、現実とのあいだに齟齬を生じた場合、どのようにしたらいいのか。まず考えられるのは、理念に合わせて現実の方を変えてしまうことです。七五九年ごろから七六二年にかけて突如として浮上してきた新羅征討計画は、そうした文脈のなかで理解すべきものとおもわれます。新羅とは宿敵の関係にあった渤海との共同作戦が計画され、軍艦の建造などがはじめられていたといいますが、なぜこの時期にこうした計画を実施しなければならなかったのか、必然性がみつかりません。「天皇」の創出という、この時期の一連の動きのなかで理解すべきことといえそうです。

さすがに新羅遠征計画は中止されますが、現実の変革が不可能ななかで理念の維持をはかる方法はひとつしか残されていません。実際の交渉を断って、現実に目をつむることです。七七九年、天皇は「表を将たざるものの境に入ら使むべからず」という詔を出し、やってきた新羅使を追却しました。このあと、九世紀の初葉に遣唐使の安全を要求する太政官符をもった使者の派遣などはありましたが、新羅との交渉は事実上断絶したものといえます。現実から目を

おおうことによって、もっぱら観念の世界に引きこもり、『日本書紀』が定式化した「蕃国」観を保持し、自らを満足させようとしたわけです。九世紀にはいってからの遣唐使廃止にいたる過程にも、そうした要素をみることは可能でしょう。渤海は、実利を求めて日本の要請に応えるポーズをとりながら外交を継続させますが、十世紀初めに滅亡しました。こののちの日本は、どこの国とも正式の外交をもたない時代にはいりますが、朝鮮蕃国観は現実の交渉のなかで問い直される機会のないまま、天皇の存在とむすびついて保存されていくことになるのです。

Ⅳ　平安・鎌倉時代の日本と高麗

――自尊と憧憬